セクシュアル・ハラスメントにおける不快感の促進要因

○ 太郎丸 博・横澤 翠子・沼田 詩暖
（京都大学）

1 問題: どのような要因がハラスメントを不快にするのか

セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラと略称）が、労働者の就業環境や学生の学習環境を害する人権侵害であることは、広く知られるようになってきた。このようなセクハラを減らしていくこと、被害が小さいうちに解決することは、重要な社会的課題である。セクハラの原因として加害者のパーソナリティが指摘されることもあるが (Fast and Chen 2009, Halper and Rios 2019)、加害者の無知や想像力の欠如が原因となることも知られている (牟田 2013)。つまり、自分の行為が相手にとってどれだけ不快なのかがわかっていない、ということがセクハラの原因となりうるのである。それゆえ、どのような行為がどの程度ひとを不快にするのか理解しておくことは、セクハラを防止する上で重要である。そのためには、優れたフィクションやノンフィクションから学ぶことも重要であろうが、本稿では、ヴィネットを使った要因配置調査実験からどのような要因が被害者の不快感を高めるのか明らかにする。

なお、以下では男性も女性も LGBTQ も被害者になりうるし加害者にもなりうると仮定する。セクハラの場合、加害者は男性、被害者は女性が圧倒的に多いが、それ以外のジェンダーの組み合わせでも被害は生じうる。ただし、LGBTQ の多様性を考慮するとヴィネットが煩雑になるため、後述の通り単純化して議論する。

2 理論／仮説

ジェンダー

性的な意図が感じられる場合のほうがそうでない場合よりも不快感は強くなるだろう。例えば同性の友人から食事に誘われるよりも、異性の友人から食事に誘われたときのほうが、トラブルになるリスクを感じるだろうし、対応も慎重になろう。緊張を感じ、不快感も高まるかもしれない。この例は誘う側が異性愛者であることが前提だが、誘う側が同性愛者であると誘われる側が知っていれば、むしろ同性の友人から誘われたときのほうが不快感が高まるかもしれない。

- ジェンダー仮説: 性的な意図が推測できるような加害者と被害者のジェンダーの組み合わせのほうがそうでない組み合わせの場合よりも被害者の不快感は強い。

権力

同じことをされても加害者が権力を持っているほど被害者の不快感は高まるだろう。加害者が権力を持っているほど被害者の異議申し立ては困難だし、異議を申し立てたとしても報復されて被害が拡大する恐れがある。このような推測が成り立つため被害者の不快感も高まるだろう。具体的には、地位が高いほど権力を持っていることが多いので、以下のような仮説が考えられる。

- 地位仮説: 加害者の地位が高いほど被害者の不快感は強い。

また、セクハラのような性にまつわるトラブルの場合、加害者が現在のジェンダー秩序の中心に位置する場合のほうが、周辺に位置する場合よりも発言力や影響力を持ちやすいだろう。なぜならセクハラを認定する人たちもジェンダー秩序の中心にいる場合が多いので、彼らの言い分に共感や理解を示しやすいかもしれないからである。このような権力を被害者が感知することで、不快感が高まるかもしれない。具体的には男性の方が女性よりも、異性愛者のほうが同性愛者よりもジェンダー秩序の中心に近いとすると、以下のような仮説が考えられる。

- 男性加害者仮説: 加害者が男性の場合のほうが女性の場合よりも不快感は強い。
- 加害者異性愛仮説: 加害者が異性愛者のほうが、同性愛者よりも不快感は強い。

3 データ

調査票は 3 種類あり、回答者は無作為に割り当てた。表 1 のように A 票に対する回答が少ないが、回答者が無作為に割り当てられているという帰無仮説は棄却されない ($X^2 = 2.3, \mathrm{df} = 2$)。調査対象者は学生で、大学院生や研究生も含む。京都大学の学生が大半だが、他大学の学生も含む。所属大学の不快感に及ぼす影響を検討したが、有意な効果は見られなかった。2021 年度に京都大学文学部の社会学実習を履修した学生に友人・知人に調査依頼するように指示した。また、太郎丸が担当する講義の受講生にも依頼した。回答は、2021/10/06 から 26 のあいだに回収された。回答者の属性の分布は表 1 のとおりである。

表 1 回答した大学生の基本属性

性別	学年	大学	調査票
女 :174	1 年生 : 19	京都大 :197	A 票: 95
男 :133	2 年生 : 61	同志社 : 7	B 票:100
その他: 4	3 年生 :118	立命館 : 7	C 票:116
	4 年生 : 51	大阪大 : 6	
	研究生、聴講生など: 8	早稲田 : 4	
	大学院生 : 54	(Other): 60	
		NA's : 30	

SNS 等でも回答を依頼し、拡散されているので、正確な依頼数は不明だが、概算で 1153 人に依頼し、有効回答数は 311 人で、回収率は 27%であった。

実験計画の概要

性別、学年を尋ねたあと 「あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」〜「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。 ### 以下の文中の「ストレート」とは異性愛者のこと。 ###」というリード文に続いて以下の例のようなヴィネットを一つの調査票あたり 13 提示した。「親しいゼミの教授（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた」。「あまり親しくないゼミの友人（女で同性愛）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた」。回答者はこれらに対して、6 段階で不快感を評価する。

ヴィネットは、以下の 6 つの次元からなる。1. 加害者との親しさ（親しい／あまり親しくない）、2. 加害者の地位（教授／先輩／友人）、3. 加害者の性別（女／男）、4. 加害者のセクシュアリティ（ストレート／同性愛）、5. 場所（LINE/廊下で立ち話をしているとき）、6. 被害の種類（異性の好みについて聞かれた／夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった／容姿をけなされた）。$2^4 \times 3^2 = 144$ 通りの組み合わせがあるが、回答者の負担やサンプル・サイズを考慮して、13 ヴィネット× 3種類の調査票 = 39 種類のヴィネットを選んだ。加害者の性別、地位、被害の種類とその他の変数の交互作用が推定でき、次元間の相関ができるだけゼロに近づくようにヴィネットは選んだ。次元間相関の絶対値は最大で 0.13、平均で 0.03 であった。実験計画の作成には、R の AlgDesign パッケージ (Wheeler 2019) を用いた。

分析には回答者をレベル 2、ヴィネットをレベル 1 とするマルチレベル・モデルを採用し、推定には制限最尤法 (REML) を用い、R の lme4 パッケージを用いた (Bates et al. 2015)。

4 分析結果

分析結果は表 2 のようになった。モデル 2 を見ると、地位仮説、男性加害者仮説、加害者異性愛仮説を支持するような結果になっているが、モデル 3 では、これらの仮説に対応する主効果で有意になっているのは、地位仮説に対応する教授ダミーだけである。いっぽうジェンダー仮説に対応する 4 つの交互作用効果のうち、予測どおりに正の有意な効果を示しているのは、被害者女 × 加害者ストレート男だけで、二つはむしろ有意に不快感を下げている。

表 2 不快感を予測したマルチレベル・モデル (REML)

	Model 1	Model 2	Model 3
切片	3.37 ***	1.83 ***	1.90 ***
	(0.04)	(0.08)	(0.08)
回答者（被害者）女		0.24 **	0.14
		(0.08)	(0.09)
〃　　その他		0.16	0.10
		(0.35)	(0.35)
親しくない		0.19 ***	0.19 ***
		(0.03)	(0.03)
先輩（基準：友だち）		0.04	0.05
		(0.04)	(0.04)
教授		0.39 ***	0.39 ***
		(0.04)	(0.04)
加害者が男		0.19 ***	0.06
		(0.03)	(0.05)
加害者が同性愛者		-0.09 **	0.02
		(0.03)	(0.05)
廊下ダミー		-0.15 ***	-0.17 ***
		(0.03)	(0.03)

	Model 1	Model 2	Model 3
無視（基準：異性の好み聞かれた）		1.52 ***	1.54 ***
		(0.04)	(0.04)
容姿をけなされた		1.95 ***	1.97 ***
		(0.04)	(0.04)
被害者女 X 加害者ストレート男			0.29 ***
			(0.07)
被害者女 X 加害者同性愛女			-0.15 *
			(0.07)
被害者男 X 加害者ストレート女			-0.14 *
			(0.07)
被害者男 X 加害者同性愛男			-0.12
			(0.07)
BIC	14530.42	12517.48	12532.91
Log Likelihood	-7252.75	-6204.76	-6195.88
事例数	4039	4039	4039
回答者数	311	311	311
回答者間分散	0.38	0.39	0.39
Level 1 分散	1.93	1.10	1.09

5 議論

地位仮説については支持された。つまり、学生よりも教授が加害者の場合のほうが同じ状況で同じ行為をしても被害者の不快感が高くなる。ジェンダー仮説、男性加害者仮説、加害者異性愛仮説については、単純には支持されず、修正が必要なようである。すなわち、これらは単体では不快感を高めるわけではなく、組み合わさって不快感を高める可能性が考えられる。すなわち、単に性的意図が推測されるだけでなく、加害者がストレートの男性のようにジェンダー秩序の中心にいるということも組み合わさってはじめて不快感を高めるということが、分析結果からは示唆される。

文献

Bates, Douglas, Mächler, Martin, Bolker, Ben and Walker, Steve 2015. Fitting linear mixed-effects models using lme4. *Journal of Statistical Software* 67 : 1–48. doi: 10.18637/jss.v067.i01

Fast, Nathanael J. and Chen, Serena 2009. When the boss feels inadequate: Power, incompetence, and aggression. *Psychological Science* 20 : 1406–13. doi: 10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x

Halper, Leah R. and Rios, Kimberly 2019. Feeling powerful but incompetent: Fear of negative evaluation predicts men's sexual harassment of subordinates. *Sex Roles* 80 : 247–61.

牟田和恵 2013.『部長, その恋愛はセクハラです!』, 集英社.

Wheeler, Bob 2019. *AlgDesign: Algorithmic experimental design*, R package version 1.2.0.